

岐阜農林事務所の普及活動状況 令和4年11月30日現在

今月の重点活動

■新規就農者 令和4年度岐阜地域農業担い手情報交換会開催

岐阜農林事務所では、就農5年目未満の若手農業者と担い手リーダーの代表者等の先進的農業経営者、関係機関による「農業担い手情報交換会」を毎年開催している。この情報交換会は、新規就農者の技術向上と経営の安定や、新規就農者が孤立することなく地域農業の担い手として独り立ちできるようになることを目的としており、今年度は11月21日に、OKBふれあい会館を会場に開催し、新規就農者ら約60名が参集した。

当日は、まず初めに、今年度新規に就農した農業者が自己紹介を行った後、就農応援隊長を務める女性農業経営アドバイザー岐阜ブロック会長から激励の言葉をいただいた。その後、各務原市でいちご生産を行う先輩の新規就農者による事例発表と、あらい社労士事務所代表による講演を行った。出席した農業者は熱心に聴講するとともに、事例発表や講演では積極的な質問も多く出て会場が盛り上がった。

(地域支援第一係・山田 和彦)



【先輩就農者が事例を発表】

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■いちご 生産者主役の研修会 ～いちごワークショップの開催～

岐阜県園芸特産振興会いちご部会主催のいちごワークショップが、11月1日に岐阜県JA会館で開催された。開催に当たって農林事務所は、部会事務局と事前に進め方を打ち合わせをして準備を進め、生産者1人1人が自分の考えや意見を述べて討論する形式で実施することとし、当日はコーディネイト役を務めるなどした。

出席者は3グループに分かれて、「単収向上のための技術」、「作業の工夫」の2つのテーマで討論を行った。普段、各地で開催される栽培研修会等では、生産者は受け身で話を聞くことが多く、開催前は順調に進むか心配されたが、全グループとも予想以上に活発な討論がなされて盛り上がり、若手、中堅、ベテランに関わらず、生産者は大きな刺激を受けたと思われた。

今後のいちご生産者の経営安定、「岐阜いちご」の更なる発展のためには、生産者自身が「自分で良く考える」ことが重要になると思われ、今回のワークショップをきっかけに「自ら考え、皆で議論する」という雰囲気作りや意識高揚を図り、自主的な勉強グループが発足することを目指して活動を継続していく。

(園芸産地支援第二係・菊井 裕人、若原 浩司)



【ワークショップの様子】

■農事功績表彰 農業法人代表者が大日本農会「緑白綬有功章」を受章

令和4年度農事功績者表彰式が、11月17日に東京都港区の赤坂インターシティコンファレンスにおいて挙行され、管内から農事組合法人巣南営農組合代表理事小川勝範氏が農事功労者として「緑白綬有功章」を受章した。11月24日には、農林事務所を訪問し、土屋所長へ受賞を報告された。

この事業は公益社団法人大日本農会が主催し、産地形成・農業技術改善・青年農業者育成などに功績のあった農業者等を表彰するもので、今回106回を数える歴史ある事業である。

今回受章した小川代表は59年に及ぶ農業歴の中で巣南営農組合の設立と経営に携わり、大規模水田農業を実現する一方、水田農業の担い手組織会長としての立場から稲作経営者の意見を取りまとめ、行政やJAへ



【受章を報告する小川代表(左)】

色々な提言を行ってきた功績が認められたものである。

本表彰により、担い手の営農意欲の向上、地域水田農業の活性化に繋がることが期待されている。

(地域支援第三係・松本 政行)

■農業高校 農業の現場を学ぶ出前講座開催

11月18日、岐阜県立岐阜農林高等学校において、「農業の現場を学ぶ出前講座」が開催された。この講座は、農業の魅力を農林高校の生徒に伝えるため、担い手リーダー等の農業者が講師となり、農林高校と農林事務所が連携して実施しているものである。

当日は、岐阜地域青年農業士連絡協議会会長でもある各務原市のトマト農家が園芸学科1年生約40人に講義を行った。

講師から、「わたしがなぜ農業を始めたか」というテーマにより、大学で水耕栽培に興味を持ち海外留学したことや、トマト栽培のみでなく、飲食など経営の拡大への取組みなどについて話された。

生徒からは、農業経営の拡大に対する不安はないのかといったことや自作の農産物を使った飲食への活用などについて質問があり、農業への関心を示していた。

農林事務所からは、将来の進学先として「岐阜県農業大学校」と「岐阜県立国際園芸アカデミー」を紹介した。次回は、2月に流通科学科の生徒を対象に出前講座を計画している。

(地域支援第一係・山田 和彦)



【講義風景】

安心して身近な「ぎふの食」づくり

■麦類 播種作業が進む

10月28日から11月末にかけて、管内の農業法人や大規模農家が麦類の播種作業を行った。今年は実需者からの増産要望を受け、小麦が490ha、大麦は30haと前年より栽培面積が増加している。農林事務所では麦類の作付にあたり、栽培こよみの監修や栽培研修会での説明、作付者との個別協議を通じて適期播種や施肥管理などについて指導してきた。今年は播種適期となる11月上旬に雨が少なかったため、播種作業は順調に進みその後の発芽も良好となっている。今後、農林事務所では雑草対策や追肥、赤かび病防除について指導し、麦類の単収向上に繋がると共に実需ニーズに見合った蛋白質含量の多い麦づくりを進めていく。

(地域支援第三係・松本 政行)



【小麦の播種作業】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■ほうれんそう（岐阜市）出荷始まる（目揃会開催）

岐阜市島地区を中心とする岐阜市のほうれんそうは、えだまめやだいこんとの輪作で生産され、10月から翌年の4月まで「岐阜ほうれんそう」として出荷される。今シーズンは、出荷初めにおいて価格が高かったことから、幸先良いスタートとなっている。

令和4年11月14日には、JAぎふ島出荷場において目揃会が開催され、およそ50名の参加者があった。目揃会では「商品の価値」を高めるため、JA、市場から出荷規格順守が呼びかけられた。

農林事務所からは、べと病や白斑病等の注意が必要な病害の対策を中心に今後の栽培管理について説明を行った。今後、JAと協力し、生育状況の把握と栽培管理指導を行うこととしている。

(園芸産地支援第一係・砂川 匡)



【目揃会の実施状況】